体育学論叢三十周年記念号に寄せて
——論叢創刊の頃——

体育学部長　藤　松　　博

学部開設が，昭和34年4月だったので，中京体育学論叢の第一巻第1号の発刊が丁度一年あとの昭和35年度の末だったと記憶している。

当時の大学は，昭和29年に開設された，中京短期大学が，中京大学として四年制の大学に脱皮してから4年程しかたっていないとゆうあらゆる面で未成熟な時期だった。

商学部商学科，体育学部体育学科の2学部2学科からなる小規模な大学だった。

先に発足した商学部が，昭和31年4月だったので，学内組織もまだまだ充分整備されていない状況にあった。論叢の編集委員会も同様で，中京大学学術研究会とゆう全学組織が存在していた．各学部から選出された2名づつの委員からなる編集委員会が，その中にあった。

中京体育論叢の創刊当時の編集委員は，商学部の河村正義，永田啓恭，そして教養部の横井敬一，加藤昭二，そして体育学部の三宅英夫，上坂武雄の6氏で構成されていた。

いづれも新進気鋭の壮年研究者の集団でありその活躍を期待されていた。

しかしながら，体育学の研究誌とゆうことになると，前記商学部，教養部の4氏は，いずれも研究分野が異なり，門外漢なので，当然のことながら，体育論叢の実質的編集は体育学部選出の三宅，上坂の両先生の肩にすべてがかかってくる。その当時の両先生のご苦労はさぞ大変だったと思う。

先にスタートしていた中京商学論叢の編集方針は年2回の発刊とゆうとりきめになっていたようだ。体育論叢もこれに準じて出発したために原稿をあつめる作業はさぞかし大変だったことだろうと思います。

それが原因かどうかは，さだかではないが，創刊から数年間は，編集と発刊に少し混乱がみえる。とゆうのは，創刊号，第一巻1号，から第一巻2号，ときて次にいきなり，3号，となり，次が第四巻1号，第五巻1号と続いている。発行年月日も一定ではなく，全体的に不統一が目につく。

当時私は助手としてお手伝いをしていましたので，その間の事情を間接的に知る立場にありました。その記憶から言いますと，目標である年2回の発行の原則を守ろうとする為に相当な無理があったように思います。

編集者としては年に2回発行する為の原稿をあつめる作業は本当に大変だったと思います。

ちなみに，創刊当時の専任で常に大学に居られた先生方の顔を想い出してみますと，教授で9名，助教授で4名，講師で3名，助手2名程度だったと思います。

教　授

学部長　斎　藤　兼　吉（体育原理）
学長　梅　村　清　明（体育原理）
三　宅　芳　夫（体操）
斎　辰　雄（陸上）
長谷川　泰　一（柔道）
佐　藤　卯　吉（剣道）
宇佐美　正　夫（健康管理，精神衛生）
上　坂　武　雄（衛生・公衆衛生）
長　嶋　次　男（栄養学・発育論）

助教授

深　井　一　三（体操）
梅　村　すみ子（陸上）
河　合　　銈（柔道）
滝　正　男（球技）

講　師

武　田　　徹（体育心理）
近　藤　利雄（剣道）
前　田　治　雄（剣道）
渡　辺　龍　策（保健体育法規）

助　手

船　戸　徳　郎（体操）
藤　松　　博（球技）

もちろんこれ以外にも専任の先生方は多数いらっしゃったと思いますが，常時会議に出られていた顔ぶれは以上のようでした。

30年も以前の話になりますので，これを読まれる方にその頃がどんな時代だったかを知っていただく為に国の内外の出来事を付記しますと，

国内では当時の皇太子殿下（現天皇）のご成婚のあったのがこの年です。また秋には，伊勢湾台風の襲来があり，東海地区に大きな被害をもたらしたのもこの年です。国外では，ローマオリンピックがその翌年に開かれています。

創刊号の中京体育論叢第一巻第1号の論文は次の通りでした。

第一巻　第1号（1960）

体育学論叢序文……梅　村　清　明…（1）
栄養とスポーツ……長　嶋　次　男…（5）
憲法第25条の「健康にして文化的な生活権」
　　をめぐって
……渡　辺　龍　策…（33）
本学園高校生の体格体力の現況と
　体格の変遷について
……三　宅　芳　夫…（55）
我が国国民体育はどこへ行く
……斎　藤　兼　吉…（77）
新陰流並びに柳生流の神髄
……佐　藤　卯　吉…（95）
球技のインターバルトレーニングについて
　高校ハンドボール合宿における考察
……藤　松　　博…（103）
最近の背泳法の分析
……N. M.クリュコフ・稲垣兼一訳…（135）

創刊号の論文について少し解説を加えますと，

・「体育学論叢序文」　梅村清明

体育学部の発足を祝い，建学の精神を説かれた論文。

・「栄養とスポーツ」　長嶋次男

スポーツマンの栄養摂取の必要性について多くのデータをもとに説明されたもの

・「憲法第25条の健康にして文化的な生活権」　渡辺龍策

新しい憲法の中に求められている文化的な生活を営む権利について触れ，その文化の中に健康・スポーツがいかに位置づくかをまとめられた論文だった。

・「本学園高校生の体格体力の現況と体格の変遷について」　三宅芳夫

平田式の体格体力判定法を用いて，中京高校生の体力測定記録を分析した論文。

・「我が国民体育はどこへ行く」　斎藤兼吉

初代学部長の斎藤先生，アムステルダムのオリンピックに，陸上競技と水泳の両種目に代表選手として参加された方で当時としても，めづらしいキャリヤの人でした。その後先生は長年にわたって各地の大学で教鞭をとられ本学に来られた方でした。長年の経験を通しての体育哲学を論文にされた格調の高いむつかしい論文だった。

・「新陰流並びに柳生流の真髄」　佐藤卯吉

剣道界の理論的第一人者であった先生は各流派の根底に流れる思想について資料をもとにまとめられた論文であり，難解な論文だったように思う。

・「球技のインターバルトレーニングについて」　藤松　博

高校生のハンドボール選手を被検者にして球技の継続走時間を会得する為のトレーニング法を試みた報告。

・「最近の背泳法の分析」

M. M.クリコフ著，稲垣兼一　訳

当時ソ連で開発されていた，種目別トレーニン

グメニューのうち，水泳についての解説書が発行されたのを訳されたもの。

以上のように創刊号は，編集の順序も，また原著と資料の区別も判然としないようないろいろな点は残しているけれども，とにかくスタートしたのである。

その後学部の教員人事も年次計画にそってすすめられ若手の多くの教員が補充されることになった。主だった人達をあげてみると，

・解剖学の平田欽逸　・生化学の三浦克巳
・サッカーの水野　隆　・バレーボールの下村満年
・ラグビーの金沢　睦　・バレーの小林平八
・野球・ソフトの大内敬哉　・剣道の恵土孝吉
・柔道の佐藤守直　・体操の渡辺幸子
・体育史の木村吉次の各先生が年次を追って着任されてきた。

当然，論叢の投稿もこうした若手の教員の原稿が多くなってきました。

その様子を知るために，第一巻第2号から第十巻第1号までのほぼ10年間のリストをあげてみましょう。

第三号　(1962)

走のトレーニング構造とその効果
　I　インターバル・トレイニングについて
……斎　辰　雄…（1）
梅　村　すみ子
堀　尾　平
食中毒（その一）……上　坂　武　雄…（47）
スポーツ振興の法律的措置について
……渡　辺　龍　策…（77）
いわゆる「野球害毒論」の一考察
……木　村　吉　次…（103）
サッカー技術指導の諸問題
……水　野　隆…（125）

第四巻　第1号　(1963)

脂肪の栄養学的意義と
　日本人体位との関連性について
……長　嶋　次　男…（1）
高島平三郎における体育「近代化」の構想
……木　村　吉　次…（67）
「心電図に現われるスポーツ
選手の傾向についての一考察」〔I〕
……藤　松　博…（135）
事故と監督義務者の法的責任
……渡　辺　龍　策…（229）

第五巻　第1号　(1964)

いわゆる「急所」についての医学的考察
……宇佐美　正　夫…（1）
兵式体操の成立過程に関する一考察
……木　村　吉　次…（23）
スポーツ活動と性格特性
……武　田　徹…（79）
高校野球甲子園戦術ならびに
　学生野球理念等について
……滝　正　男…（123）

第六巻　第1号　(1964)

日本食の歴史的一考察長　嶋　次　男…（1）
学校体操教授要目（大正2年）の
　制定過程に関する一考察
……木　村　吉　次…（47）
「心電図に現われるスポーツ
　選手の傾向についての一考察」〔II〕
……藤　松　博…（121）
「中国体育史研究」断章
……渡　辺　龍　策…（169）

第七巻　第1号　(1965)

スポーツマンの食事…長　嶋　次　男…（1）
健康教育学科の在り方についての一私見
……宇佐美　正　夫…（57）
トレッドミル法による
　持久力測定についての予備実験
……藤　松　博…（81）
嘉納治五郎の初期の柔道思想に関する一考察
……木　村　吉　次…（119）

第八巻　第1号　(1966)

トレッドミル法による持久性測定に関する研究

（そのII）
（回復過程時の姿勢の影響について）
……長　嶋　次　男…（1）
藤　松　　博
明治期修身教科書における
身体観の一考察〔I〕
……木　村　吉　次…（27）
具体的人間像のあり方に関する一考察
……本　間　幸　雄…（57）
地方スポーツ行政的立場から見た
国体に関する一考察羽　鳥　岩　雄…（85）

第九巻　第1号　（1967）

過負荷条件下での持久性測定に関する研究
（条件設定に関する予備調査）
……長　嶋　次　男…（1）
藤　松　　博
森　　喜　正
明治期修身教科書における
身体観の一考察〔II〕
……木　村　吉　次…（39）
舞踊空間形成における
表現性についての一考察
……高　橋　春　子…（89）
大　西　幸　子
少年院における体育指導の実態
—調査報告— ……本　間　幸　雄…（115）
体育原理研究会

第十巻　第1号　（1968）

階段登歩行が生体に及ぼす影響について
（主として，循環機能面での検索）
……長　嶋　次　男…（1）
藤　松　　博
野球戦術の一考察
—ヒット・エンド・ランについて—
……滝　　正　男…（41）
大　内　敬　哉
剣道形の必要性について
……恵　土　孝　吉…（71）
林　　邦　夫
Platonの体育思想について(1)
……本　間　幸　雄…（103）
舞踊教育における創造性の開発(1)
……高　橋　春　子…（129）
舞踊の時間形成における基礎的考察
……岸　本　幸　子…（155）

大学はその後着々と発展をし，昭和37年に，商学部に経営学科，体育学部に健康教育学科が開設され2学部4学科となり，更に昭和41年には，文学部，法学部が開設され，42年には，体育学部に武道学科も開設された。

10年程の間に，2学部と，7学科が増設され，一段と大きな大学になった。

当然，学術研究会もそれに従って充実され，編集委員も大幅に増加すると共に充実もした。参考までにその後の委員をあげると次の通りです。

論叢編集委員の変遷

昭和38年～
宇佐美　正　夫（体　育）
武　田　　徹（体　育）
藤　松　　博（体　育）
河　村　正　義（商　学）
三　上　正　之（商　学）
沢　登　佳　人（商　学）
加　藤　　等（教　養）
大　石　明　夫（教　養）

昭和39年～
木　村　吉　次（体　育）
武　田　　徹（体　育）
藤　松　　博（体　育）
河　村　正　義（商　学）
沢　登　佳　人（商　学）
楠　　恭　雄（商　学）
加　藤　　等（教　養）
渡　辺　龍　策（教　養）
小　林　達　也（教　養）

昭和42年～
長　嶋　次　男（体　育）
藤　松　　博（体　育）
木　村　吉　次（体　育）
山　下　幸　男（商　学）
塩　田　静　雄（商　学）

楠　　恭　雄（商　学）
沢　登　佳　人（法　学）
杉　江　栄　一（法　学）
伊　藤　紀　彦（法　学）
加　藤　　等（文　学）
倉　田　康　夫（文　学）
佐　野　一　郎（文　学）
谷　口　敬　一（教　養）
田　中　善　一（教　養）
渡　辺　龍　策（教　養）

体育論叢もこうした創刊時の苦労から数えて30年をすぎ記念号を出すことになりました。最初から何らかの形で関係してきた者の一人として感無量です。

原稿をお願いする為に自宅にまで押しかけたり，編集締切に間に合わない為に印刷所に深夜走ったりしたことなどが想い出されます。

その当時の先生方の多くが，すでに故人になられたり，また多数の先生が，大学を去られたりしています。いろいろな事が走馬燈のように私の頭をよぎります。

30年とゆう歴史の中で論叢も大きく変わりました。雑誌名が，「中京体育論叢」から「中京体育学研究」に変わり更に最近に「中京大学体育学論叢」へと呼称を変えてきました。

名称の変化と共にその内容も整備され原著論文の評価が非常に大きくなってきました。

編集規定もまた論議され厳格なものになり，それと共に雑誌の権威も高くなりました。

吾が国の私学では唯一の大学院博士課程を持つ本学の体育学研究誌としてふさわしい雑誌になりつつあることを，誇りに思います。

丁度30年前にまいた1粒の種子が，順調に育ち，大輪の花を咲かすようになりました。

関係されました多くの先生方のご苦労に対しまして心からの敬意と感謝の意を表し筆を置きます。